

楽しくて 力のつく授業 [3]

—スピーキングの指導と評価—

二宮正男 Ninomiya Masao (東京都新宿区立西戸山中学校)

① はじめに

スピーキング力をつける活動としては、音読・chat・インタビュー・show & tell・プレゼンテーション・スピーチ・ディベート・ディスカッションなどたくさんあるが、ちょっとした工夫でもっと楽しく取り組めて力が伸びる活動になる。今回はスピーキングのより効果的な活動方法を紹介する。

② スピーキング活動の工夫

(1) 音読

教科書の本文を読むとき、カタカナ読みになるなどリズムが崩れる生徒がいる。私は教科書準拠のCDに声を重ねて読む練習をさせ、さらに教科書を閉じてshadowingさせるようにしている。よく研究授業などで「1分間に何回読めるか」を競争させている活動を見るが、速く読めばいいと勘違いして発音などがおろそかになる危険性がある。CDに声を重ね、同じスピードで読む練習を繰り返すようにしたい。

(2) “What Am I?”

これは1年生から3年間ずっと続けられる活動である。教科書の登場人物や歴史上の人物はもちろん、浴衣や風呂敷などもネタにできるが、私はスポーツ選手やタレントの写真を使ってguess workをしている。クラス全体で活動するときにはA3サイズの大きな写真をホワイトボードに裏返して張り“What Am I?”を行う(写真1)。たった1枚の写真を裏返して張るだけで生徒が写真に集中するし、答



“What Am I?”の様子(写真1)

えを見せたときの「うおーっ」という歓声が場を盛り上げる。また、普通サイズの写真はランプのように1枚選ばせて個人戦に使っている。

(3) Chat

One Minute Chatを取り入れている先生方が増えているが、注意しなければいけないのは、教師と生徒の会話のキャッチボールが十分にできるようになってからでないと生徒どうしの会話は難しいということだ。ペアによっては1分間に数回のやり取りしか言えなくて時間切れということもあるし、30人以上のクラスで活動するときは、いくら録音テープなどでモニターを丁寧に行っても、苦手な生徒への支援が十分にできないまま先に進んでしまいがちである。

英語が苦手な生徒の多い基礎クラスの生徒には、まず「30秒間に5回、会話のキャッチボールをしよう」と指示を具体的に出すようにする。最初は自由な会話にならずインタビューのような会話になるが、生徒は自信を持って言えるようになると「本当に自分が言いたいこと」を話したくなってくる。

ただ、この次の段階に進むときには語いの問題が立ち塞がる。生徒が表現したい英語はクラスでシェアし、「次は1分間で10回以上のキャッチボールをしよう」などと徐々に会話を継続できるようにしている。

(4) Picture Describing

1枚の絵に対していくつかの質問や説明を加える練習を積み重ねると、いろいろな絵の描写ができるようになる。文房具店には、動物がさまざまな動作をしている絵葉書が置かれているので、私はこれを大量に購入して、次のような手順で使っている。

① 描写に使う文型を与える。

例：There is/are~. と ~ing

② クラス全体に対して、教師が絵葉書の動物について、絵葉書を見せないで説明する。(ここで(2)の“What Am I?”の活動が生きてくる。)

生徒はノートにその絵を描き、もしわからなければ英語で質問する。そして、絵葉書の写真を見せて答え合わせをする。

- ③ 生徒にペアを組ませ、生徒1人1人に違った絵葉書を配る。②の要領で、1人が絵葉書の動物を英語で説明し、相手は英語を聞き取ってノートに絵を描く(写真2)。
- ④ 答え合わせをする。ここで、英語で説明できなかった表現を生徒全員でシェアすると、生徒の説明の正確さが高まっていく。

1枚の絵を描写できる力がつくと、次は2枚の絵の違いを説明する Find the Differences を楽しむこともできる。



ペアワークの様子 (写真2)

(5) Story Telling

この活動は、東京学芸大学附属世田谷中学校の小菅敦子先生が語学教育研究所の大会で公開授業をなさってから全国の先生がその魅力に引きつけられた。私もその虜になった1人で、教科書の物語文を扱ったときは Story Telling をするようにしている。1年生のときから計画的に指導することが大切であるが、生徒の実態に合わせて次のようなタスクを与えている。

- ① 教科書の本文をそのまま使って絵を説明する。
- ② 教科書の本文を既習の表現に置き換えたり1文加えて説明する。
- ③ 教科書の内容に補足的な説明を加えたり、自分の意見をつけ加えて説明する。

私は oral introduction するときには、上記の③の「補足的な説明」を意図的に加えるようにしている。すると、生徒は教師の oral introduction を注意して聞くようになり、その補足説明を自分の発表に活用しようとする。教師と生徒のお互いの質問も増えて、一層 interactive な oral introduction に変わり、後の Story Telling に生きてくる。生徒は教師の補足説明や友だちの発表を聞いて、その表現を自分の発表にも取り入れるようになり、発表を重ねるごとに発表内容が深まってくる。

このように絵を描写する力がついてくると、4コ

マ漫画をバラバラにして Story Reconstruction させるなどと発展させることもできる。

3. スピーチの力をつける練習

(1) 下書きをしなくて話す

5～6行の簡単な自己紹介をするにも、下書きをして準備をしないと話すことができないようでは困る。そのような練習ばかりしていると prepared speech しかできなくて、原稿を read aloud するか memorize するかのスピーチになってしまう。

私は、卒業時までの3年間を見通した計画を立てて、スピーチ原稿を書かなくても発表できる力を育成するようにしている。例えば、スピーチをビデオカメラで撮影することが多いので、カメラの隣に紙を張って(写真3)、話し手からキーワードが見えるようにし、そのキーワードを参考にしながら、顔を上げてスピーチができるようにしている(写真4)。

そして、積極的に話そうとする意欲を育てるために、「話したことを書いてみよう」という指導をして

いる。間違いを恐れずに積極的に話そうとする態度を育てるためには「書いてから話す」癖をつけるのは止めた方がよい。



話し手を撮影するカメラ (写真3)



スピーチする生徒 (写真4)

(2) 和英辞典を使わないで話す

スピーチで大切なことは、話し手側よりもむしろ聞き手側が理解できているかどうかという点にある。クラスの友だちが理解できない難しい英語を使ってスピーチしても自己満足にしかならない。

私の授業では、中学2年生までは、和英辞典を使わずに、教科書の中に出てくる既習表現を用いて生徒にスピーチをさせている。しかし、教科書に載っていない表現をどうしても使いたいという生徒がいるときは、その生徒だけでなくクラス全体に表現を伝え、聞く側も理解できるようにしておく。

(3) 3年間の年間指導計画

中学校の教科書では感情を表す形容詞が多く扱われていないので、中学1年生から形容詞を豊富に与えて感情表現ができるようにしている。中学2年生で自分の意見や感想を發表することができるよう、また、中学校を卒業するときには、友だちの意見に対して自分の反対・賛成の意見を述べるように、3年間の計画を立てることが肝心である。

4. 指導と評価

スピーキングを4つの観点の中の「表現の能力」で評価する場合、この観点の評価規準は「正確さ」と「適切さ」である。次の表を見ていただきたい。

評価規準	
正確さ	初歩的な英語を用いて、自分の考えや気持ちなどを正しく話すことができる
適切さ	初歩的な英語を用いて、場面や相手に応じて適切に話すことができる

(H14.2 国立教育政策研究所教育課程研究センターの報告より)

例えば、音読テストを実施するにしても、「正確さ」を評価するのか「適切さ」を評価するのか明確にしなければいけない。1年生の最初は、「正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて」読んでいるかという「正確さ」だけを評価することが多いが、「適切な速さや声の大きさで」読んでいるかといった「適切さ」も加えて評価することも可能である。「登場人物の気持ち表れるように音読できる」という規準で評価するのも「適切さ」にあたる。

また、ALTとのインタビューテストは「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」で評価するのか「表現の能力」で評価するのかを年間指導計画で明確にしておかなければならない。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」で評価するときは、「間違いをおそれず英語で積極的に話している」などが評価規準となり、文法的な間違いを云々する必要はないが、「表現の能力」で評価するときは、「話そうとすることを聞き手に正確に伝えることができる」などが評価規準となる。スピーチも然り、である。スピーチの審査として従来から用いられている「発音・話し方・内容」という審査基準は「表現の能力」の基準であって、「間違いをおそれず英語で積極的

に話している」という「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」で評価することもできる。

5. リスニングとスピーキングはコインの表裏の関係

先生やALTのスピーチが聞き取れなくては、自分で話す土台ができない。つまり、リスニングの練習が十分でないと、インプットが足りなくて、表現しようにも表現できないのである。前回の「リスニングの指導と評価」で示したリスニングのテーマも、スピーチのテーマとして活用できる。

学年	スピーチのテーマ
1年	現在形で自己紹介 家族・友だち・有名人の紹介
2年	過去形で自己紹介 夏休みの予定 学校や町にあるもの・あったもの 将来の夢
3年	現在完了形で自己紹介 自分の町や日本の紹介(課題と提案) 中学校生活の思い出

また、リスニングとスピーキングを関連づけて、次のような指導もできる。

- ① ALTに書いてもらった原稿でリスニングの練習をさせる。
- ② そのスクリプトを生徒に配って内容を理解させる。「読んでわからないものは聞いてもわからない」ので、読んで十分理解させる時間をとる。
- ③ 後のスピーチに備えてその原稿を音読練習する。
- ④ 再度ALTに原稿を読んでもらい、「話せると聞き取れる」ことを実感し自信をつけさせる。中学生の場合、身近な話題の話し不足がすべての活動に影響するので、生徒が使いたい語いはリストアップしていつでも提示できるようにしておくか、教室に張っておくとよい。

6. おわりに

「話す」という行為は決して一方通行ではない。必ず聞き手がいて、コミュニケーションが生まれる。たかが30秒のchatでも、相手の話したことに對して必ず自分の意見や感想を言う習慣を積み重ねたいものである。特にスピーチは、短くてもいいので、スピーチのあとにスピーカーと聴衆との間で意見交換ができるほうが、一方通行で言いっぱなしの「暗記スピーチ」より実りの多い活動になる。